

II 特別シリーズII

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプラン』友情と感激

東京大学の活動報告



須田礼仁
(東京大学大学院情報
理工学系研究科教授)

インド工科大学から
情報通信関連技術の
招聘

東京大学情報理工学研究科は、インド工科大学(IIT)の学生を対象に「日印を結ぶ次世代ICTを担う先端研究」をテーマとしてプログラムを計画し、2015年度に初めてさくらサイエンスプラン(SSP)に採択された。16年に1件、17年には日印の情報通信技術分野での人材交流活発化を目的とした「最先端情報通信技術における日印トップレベル大学研究交流プログラム」が複数年度計画(3年間)として採択され、これまで合計5回にわたり延べ44名のIIT学生を受け入れた。情報理工学研究科は、工学系研究科とともに、文科省の補助事業「大学の世界展開力強化事業」に採択され、14年から5年間にわたりインド連携校との学生交流を推進してきたが、補助事業期間中そして終了したあとでも、インド連携校との交流を発展 継続させていくために、SSPが極めて有効に機能している。



日本語入門の授業



日本文化(茶道)の体験

双方の担当教員により、IITから優秀な学生を選抜し、本研究科が世界的に強みを持つスマートシティ、高性能計算、先端アルゴリズム等の研究室にて世界水準の研究を体験してもらうとともに、我が国の情報通信関連の科学技術のすぐれた点を総合的に理解することができるよう企画している。今年のプログラム初日には、これまでと同様に、日本文化を体験してもらったため、1日日本語教室および茶道体験を実施した。また、期間後半にはチームラボプラネッツと鉄道

2019年に関しては、6月23日から7月13日の3週間にわたり、IITデリー校、ハイデラバード校、カラグプール校、マドラス校より合計10名の学生(大学院学生7名、学部学生3名)とIITデリーの教員1名を招へいした。IITハイデラバード校、デリー校、マドラス校と本研究科とは、これまでも連携を進めてきたが、今回は初めてIITカラグプール校からも1名参加があった。本プログラムは、これまでの連携を礎に、

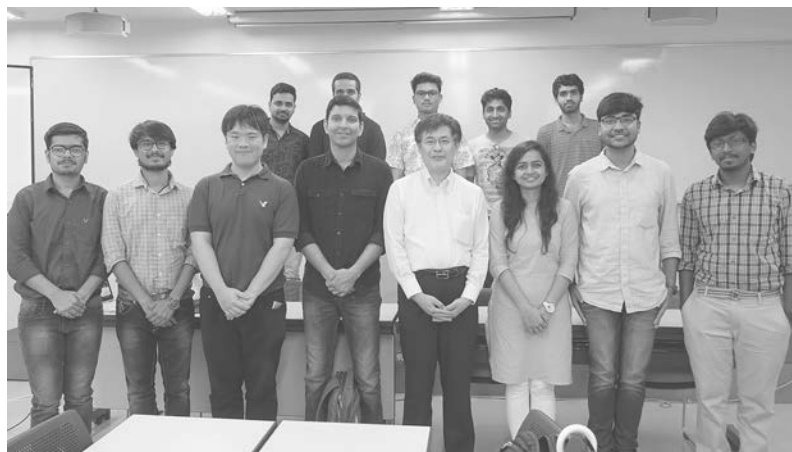
プログラム	
1日目	到着
2日目	ガイダンス 日本語教室 文化体験(茶道教室)
3~15日目	研究室に配属され、 各学生の専門に応じて研究活動に従事
16日目	鉄道博物館、 チームラボプラネッツ訪問
17~19日目	研究室にて活動
20日目	修了式 (研究活動報告と修了証授与)
21日目	帰国

博物館への日帰りバス旅行を企画した。チームラボプラネッツは、コンピュータグラフィクス・ユーザインタフェース・AIなど情報理工技術から作った展示であり、学生にとって、その技術の応用例から学ぶことが多くあった。一方、インドでは日本の新幹線方式を採用した高速鉄道プロジェクトが進行中であり、鉄道博物館にて我が国最先端の鉄道技術に関する知見を一層深くすることができたと考える。IITの引率教員には、滞在期間中に集中講義を行っていたが、本学の学生がインドの最先端の研究の一端に触れる機会となった。

プログラムの成果

採択初回の招へい学生はIITハイデラバード校のみであったが、2回目以降参加者は他のIITへも拡大した。前述のとおり、今年はIITカラプール校からの参加があったが、このあと、IITカラプール校の学長が本学を訪問したことを契機に、情報理工学研究科と学生交流の覚書が締結され、今後さらにカラプール校との学生交流も発展していくことが期待される。

滞在中の文化体験視察場所としては、神戸の京コンピュータ、山梨県リニア見学センターなど科学技術の最先端を目の当たりにできる場所、および京都、川越など日本文化を直に体験できる場所、など吟味して選定し初来日したインド人学生にとって記憶に残る



修了式で記念撮影

体験になったものと考えている。プログラム全般として、各学生の専門分野に応じた研究室の受入調整や、ベジタリアンが多いインド学生に配慮した視察計画など、回を追うごとに細かくプログラムの改善を図ってきた。

世界の先端をゆく本学の研究に触れることで研究への興味に目覚める学生も多く、本プログラムでの体験により着実に成果が上がっていることを実感している。例えば、訪問先研究室にて、学生自身の持つ知識やこれまでの経験を教授にぶつけてみたり、その研究室が取り組む課題の一部に関与してみたりする中で、本学の研究に対して新鮮な感覚を持ったようである。それに加えて、日本文化への理解、わが国の同年代の学生との交流事業を通して、日印を結ぶ人的ネットワークを醸成し、多くの優秀な人材の日本への継続的な興味を喚起することができたと考えている。

今後の展望

これまで各回の経験を蓄積して、短期間ながらも充実した研究環境を提供することを中心に、さまざまな日本の文化に触れられるような機会を提供してきた。今後とも、より多くの優秀なインド人学生に日本のすばらしさと本研究科のすぐれた研究環境を体験してもらいたいと考えている。



最終報告会



修了証の授与

同時に、インド人学生受け入れが本学の在学生にとっても大きな刺激になることを実感しており、本学の教育の高度化にも貢献が期待できると確信している。IITとの学術・学生交流は着実に重要性を増しつつあり、今後も積極的にSSPを活用できるようなプログラムを企画していきたいと考えている。

